

特別編・後編

こんにちは。塾長の大井です。

前回の続きです。

「祖父の本棚。」～後編～

祖父は医師でありながら、多くの医学の常識を超えた患者でもあった。

煙草も吸わず、愚痴ももらさず、お酒も嗜む程度だった祖父は、その質

素で堅実な生活から、ずっと壮健に歳を重ねてきた。しかし、70 を超

えてからはいくつもの病と闘い、いくつもの病と生きてきた。

印象深いのは90歳を超えて大病を患った時だ。

僕の父は医師としての見地から、

「もうおじいちゃんの姿は見れないかもしれない……。今回は最後かもしれない……。」

と沈痛な面持ちで言った。

それでも祖父は、驚異的な生命力を見せ、病から回復し、また今日を生き

た。

医学でも、科学でも説明のつかない回復だった。

そこには、祖父が大好きでずっと人生を共に歩んだ、祖母の存在がある

ように思えてならない。

その祖母も今年で 93 歳になる。

誰よりも大きな祖父は、病床にあっても決して弱音を吐かず常にポジティブだった。

祖父は自身の人生を「ええ人生やった。ええ人生を生きた。」と何度も言った。

祖母のこと、孫たちのことを病床でいつも案じて、変わり無いよと母が言うとても安心していた。

祖父は医師として 94 歳まで往診を続けた。

診察しながら、認知症になってからの祖母の世話を、朝食を自転車で買いに行き、自分が倒れるまで文句ひとつ言わずにやった。

今年になってまったく食べることも飲むこともできなくなり、末期は結核を患った。

結核治療の薬が強く見るからに息も辛そうな時に、母がしんどい？と聞くとまあまあとだけ答えた。

それが祖父の最後の言葉になった。

遺された祖母は認知症でもう孫の名前も覚えていない。僕の顔を見てもただにっこり笑うだけだ。

それでも葬儀の日、祖父が死んだことを聞かされると、

「死んだん？死んじゃったん？」

と言ってとても困った顔をした。

本当に困っていた。

まいったな弱ったなというような、少女のような顔だった。

そしてお別れの時、柩に入った祖父の額にそっと手を当てて泣いていた。

まるで子どものような泣き方だった。

祖母は認知症だからきっと明日にも忘れてしまうだろう。

でもそれでいいのかもしれない。

祖父は自分が亡くなる悲しみに、祖母が傷つき苦しむのを見かねて、祖母がボケるまでがんばって生きたのかもしれない。

祖父はそういう人だった。

おじいちゃん、僕はあなたの本棚から、未来を見出したのかもしれない。今子どもたちに、学ぶことを通して、物語を通して、生きることの価値やすばらしさを教えています。

95歳の最後まで、見事に生き切られたおじいちゃんをとても誇りに思っています。

僕もおじいちゃんに恥じない人生を歩みます。

神様に感謝、おじいちゃんに感謝。

2018年10月29日

大井雄之